

地域のできで支え合い

誰もが安心して暮らせる地域を目指して、あいうふくしモール運営委員会

ほんなら堂事業



↑全4回のほんならサポーター養成講座。コミュニケーションや介助についてなど、講座と実習を組み込んで行われています。

「ほんなら、こんなことが出来るけど、どう？」
地域の中で助け合える仕組みとしてスタートした「ほんなら堂事業」。平成27年10月にあいうふくしモール内の3つの施設が連携してスタートしました。ゴミ出しや掃除、草刈り、さらに日常生活に欠かせない、毎日の食事や買い物など、公的な制度(介護保険制度等)の利用だけではカバーできない困りごとを抱えている高齢者等が増えています。
こうした方達を支援するには、身近な住民の方々の力を借り、支え合うことが必要です。そこで、あいうふくしモールでは、地域のサポーターを養成し、地域の困りごとを地域で解決できるしくみづくりを始めました。コーディネートが利用者から暮らしの全般に関わる相談を受け付け、対応できるサポーターに依頼し解決を図っています。

また、困りごとの中には、就労支援が必要な若者の就労体験は、地域の特産品を一つからつくることで、退職した方が第二の人生の生きがいにと、多数参加されています。数年後、梨づくりの自信のついできた体験メンバーが、自分たちで梨の生産を始めたいと「愛工コ梨倶楽部」を立ち上げられました。

あいうふくしモールとは
地域で働き、暮らす事ができる場所として、障がい者の社会参加を支援する「NPO法人あいう和楽」高齢者の生活を支援する「NPO法人結の家」地元の農産物を調理提供する農家レストラン「ファームキッチン野菜花」を営む、「株式会社あいうふくさと工房」が共同で運営しています。

問い合わせ先

住所：滋賀県東近江市小倉町1975-2 電話：0749-46-2170 HP：http://fukushi-mall.com/wp/

地域特産農産品を活用した地域連携事業

東近江市愛東地区は、果樹の生産が盛んで、梨やぶどうといった特産品を多く生産している地域です。NPO法人愛のまち工コ倶楽部が、そんな土地柄を生かそうと始めたのが「田舎もの体験」。田舎暮らしの象徴である農業体験ができます。その中の一つ「梨づくり体験」は、地域の特産品を一つからつくることで、退職した方が第二の人生の生きがいにと、多数参加されています。数年後、梨づくりに自信のついできた体験メンバーが、自分たちで梨の生産を始めたいと「愛工コ梨倶楽部」を立ち上げられました。



←育てる苦労も感じながら、本当の農業に触れます。

問い合わせ先

住所：滋賀県東近江市妹町70 電話：0749-46-8100 HP：http://ai-eco.com/

「ムラサキ」でつなぎ、ひろがる

滋賀県立八日市南高等学校

東近江市は、万葉集の代表歌である「あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る」(額田王)が歌われたところといわれています。ここに歌われている「ムラサキ」をテーマに八日市南高等学校から協働の取り組みが生まれ、地域の方々を中心に「紫草を育てる会」が結成され栽培・研究が始まりました。栽培困難種なので、試行錯誤しながらの取り組みです。連作障害により、収穫量を増やすことが難しく、安定した商品供給ができませんでしたが、研究により連作障害の仕組みも分かり、解決の糸口も見えました。

それと共に、「ムラサキ」を用いた商品開発も進み、その経過はつなかりがたりを産む形で広がりました。八日市南高等学校は栽培研究、紫草を育てる会は栽培、その他、地元企業が「ムラサキ」にちなんださまざまな商品の開発に取り組み、地域おこし協力隊は永源寺地区でのムラサキ栽培及び普及と、役割も分担するようになってきました。

↑ムラサキの染料。独特の深い風合いが特徴です。

根の色素が紫色の染料になる。東近江市の花としても指定されています。→

東近江市の花「ムラサキ」を用いたの商品開発

「ムラサキ」の商品開発に関わった企業
・井上製菓：お菓子「あかね」の製造販売
・布引焼窯元：布引焼の植木鉢・袱紗制作
・ファブリカ村：染物、洋服等の販売

問い合わせ先

住所：滋賀県東近江市八日市春日町1-15 電話：0748-22-1513

特産品から生まれる地域連携

梨づくりを通して特産品づくり、NPO法人愛のまち工コ倶楽部

ここで、梨づくりの現状や楽しさ、大変さを感じてもらいたい、それでもやりたいと思ったり、人が愛東地区の住民となり、梨生産の担い手として活躍されているそうです。

買い物に行く時、多くの方は、自動車や移動されることでしょうか。しかし、高齢や障がいなどの理由で自力の交通手段を持つておられない方がおられることをご存知ですか。「買物お帰りきっぷ」事業は、交通弱者の解消とマイカーからバスへの利用転換で、地域の課題解決に取り組んでおられます。

買物お帰りきっぷ事業

市が運営するバスと企業との協働のキーワードは、「交通手段の開拓」でした。マイカー利用の多い東近江市。「コミュニティバス」、「ちよこつとバス」は、乗客数の減少と維持に悩んでおられました。交通弱者にとって無くてはならないバス。今後も運営を継続していくためには、マイカー利用者、バスを利用してもらええるアイデアが必要でした。八日市駅前位置し、長年地域の台所としての役割を担っている、ショッピングプラザアピシア(アピア)は、主要道路の沿線に次々と新しいスーパーが建つ中で、顧客の獲得が重要な課題でした。交通弱者に対し、独自で送迎バスの運行を検討され



↑「ちよこつとバス」は全部で4色のバージョンがあり、可愛いデザインが特徴です。



↑「お帰りきっぷ」は期間を延長し現在も継続中。事業開始以降、昼間のバス乗客数が増えました。

問い合わせ先

住所：滋賀県東近江市八日市緑町10-5 電話：050-5801-5658

国籍が違っても気軽に挨拶できる関係を目指して

おうみサンバ・パークッション・ワークショップ

湖東へムスロイド村で、サンバ音楽を通じて国籍が違っても、誰もが気軽に交流することを目指している事業があります。おうみサンバ・パークッション・ワークショップです。東近江市内には多くの外国籍の方が住んでいて、特にブラジル国籍の方が、県内で一番目に多いそうです。しかし、普段の生活の中で関わりを感じることが少なく、もっと国籍を越えた関わりをきっかけがほしいかと、サンバ音楽を通じてワークショップを始めました。

共感が生まれ、つながりがつなかりを生んでいます。事業の認知度が上がることで、地域の方達がブラジルの方達のことを知り、簡単なあいさつを交わされるようになっていきました。そうして、地域に溶け込んでいく自信に繋がっています。今後さらにつながりを広げていき、お互いに気軽に地域になつていくことを願っています。

おうみサンバ・パークッション・ワークショップ

事業を進めるにあたり、ワークショップ参加の声かけにブラジル人学校のサンタナ学園が協力し、サンバ音楽の演奏指導としてサンバ隊のデニス・ペルタドールやフェリシオ・プレットに協力頂き、子ども達も気軽に交流できる場づくりをしています。また、毎年9月頃には、企業と連携して実施されている、「京都サンガブラジルデー」への参加や、MIOびわこ滋賀の試合にも招待されています。



↑ワークショップの様子。大人も子どもも一緒にサンバのリズムを奏で楽しめます。



↑京都サンガブラジルデーでの演奏。観技場の中で演奏できる貴重な経験となっています。

問い合わせ先

住所：滋賀県東近江市下中野町637番地 (NPO法人加案内) 電話：0749-46-0608

JAZZでまちを元気に!

東近江が音楽であふれる2日間、びわこJAZZフェスティバル実行委員会

桜とともに東近江の春を彩るビッグイベント「びわこJAZZフェスティバル」は、東近江。平成21年のイベント立ち上げ時に込められた、「びわこ」に音楽の輪が広まれば、という思いが、まちの様々な人々を巻き込んで、180組以上の出演者が、街中の36カ所の特設ステージで演奏し、市内外から3万人以上が訪れる大きなイベントとなっています。

素敵な音楽が街にあふれる東近江。会場、演奏者、観客が一体となる心地よいひと時を過ごすとともに、様々な東近江の魅力を体感できるイベントとしてさらに発展していくことが期待できます。

びわこJAZZフェスティバル in 東近江

様々な人や団体が協働して実施していることで、年々新しい展開が生まれています。8年目を迎える平成28年は東近江ならではのイベントとして、「びわこジャズ東近江」と名称を変更し、装いも新たにスタートします。



問い合わせ先

住所：滋賀県東近江市上之町5-22 2階 E-mail: amigom@mb.infoweb.ne.jp HP: http://biwako-jazzfes.com/

地域の子どもたちに、この地域でしかできない体験をしてもらいたい。平成12年から、学習指導要領に取り入れられた「総合的な学習の時間」をきっかけに始められた、ふるさと地域ウォーク。地域内の人たちの顔と名前が一致すること、子どもたちに地域の歴史を学んでもらうこと。この2つを目的に、この地域でしかできない体験の場を企画されています。



↑コースのひとつ、座禅体験の様子。体験内容はどれも工夫されています。

出発前の様子。参加した子どもからは、楽しかったとの声が多く、地域の魅力を再発見して帰ってきます。→

問い合わせ先

住所：滋賀県東近江市小川町30 ☎：0748-42-0135



ふるさと地域ウォークを支援しているのは、推進委員を筆頭に、小学校、地域の主婦やシニア、地域で主体となつていく企業などです。通常だとあまりつながる機会のない組織や個人でも、この行事が世代や立場を越えた交流のきっかけとなり、企画を支えています。何気なく暮らすいつもの風景ですが、ふるさと地域ウォークだからできる体験や経験は子どもたちにとって貴重な時間となっています。いくつかのコースの中に、は消防体験やお寺で座禅体験があるなど、個性的で地域性に溢れています。子どもから大人まで世代を超え

Corabook

コラム

協働で魅力あるまちづくり

東近江市総務部管理監（まちづくり協働課課長） 黄地 正治

今日、ほとんどの自治体の総合計画や各種行政計画において「協働」による政策推進を謳っています。公共サービスを担うのは行政だけでなく、市民も担い手となりうるし、行政と市民の協力関係によって分担できるという考え方に基づくものです。行政は市民と協働で施策を進めたいと考えていますが、必ずしも市民の思いとは一致していないケースも見受けられます。そこには財政事情が厳しくなる中、行政改革の手段の一つとして、事業負担の軽減を「協働」に期待する自治体の姿勢があることは否めません。そのような行政の打算を市民は薄々感じているでしょう。

本事例集には、市民が行政の仕事の肩代わりをしているような活動は見当たりません。地域の課題を我がこととして捉え、地域に関わりを持つ者同士が手を取り合ってまちづくりに取り組んだ結果が、協働事業だったという事例集です。声高に協働を叫ぶよりも、まずは地域に愛着を持って、当事者として出来ることから始め、必要に応じて協力し合うということではないでしょうか。「協働」の目指すところは、主体的に取り組まれる多様な活動が地域を元気にすること、そして、活動に共感してつながりあうことで一人ひとりが輝き、元気になることです。そのことは、既存の公共サービスの提供を分担することに留まらず、地域に新たな価値を創造し、まちを魅力あるものにするでしょう。

そんな「協働」がこのまちに増えることを願ってやみません。



ふるさとを想う心を育てる

この地でしかできない経験の場

能登川東学区ホットスマイル

地域の子どもたちに、この地域でしかできない体験をしてもらいたい。平成12年から、学習指導要領に取り入れられた「総合的な学習の時間」をきっかけに始められた、ふるさと地域ウォーク。地域内の人たちの顔と名前が一致すること、子どもたちに地域の歴史を学んでもらうこと。この2つを目的に、この地域でしかできない体験の場を企画されています。

た協働がこの取り組みには欠かせません。昨年度は80名もの子どもたちがふるさと地域ウォークに参加し、地域の魅力や大人との出会いを楽しんだそうです。子どもたちが、進学や就職などで故郷を離れても、心のどこかでふるさとへの思いを持ち続けてほしい。地域の皆さんのこの思いが取り組みの原動力となっております。



↑公園の花壇に花を植える。子どもたちと地域が一緒に公園づくりをすることで、交流のきっかけが生まれています。



皇美麻公園の妖精の扉。子どもたちは扉からさまざまな夢を膨らませます

問い合わせ先

住所：滋賀県東近江市八日市町9-30 ☎：050-8034-1141
八日市コミュニティセンター内

TEAM CHAKKA

地域の宝を活かして働く場をつくる

資源循環でできた着火剤

TEAM CHAKKA

住所：滋賀県東近江市妹町70 ☎：0749-46-8100

市有地圃場を地域活性化に役立てる取り組み

蒲生の地からつくる



↑地域のひとと一緒に市有地で特産品を育てています。

黒豆の古代種「ささげ」。神様に捧げる黒豆だったことからその名がつけました。→

問い合わせ先

住所：滋賀県東近江市市子川原町461-1 ☎：0748-55-3030

みんなの公園をみんなの手で

皇美麻公園イメージアップ大作戦

八日市地区まちづくり協議会 冒険遊び場プロジェクト



地域の課題と魅力を発見するまち歩きで、薄暗く活用されている公園の存在に気づき「こんな公園になったらいいな」という夢の公園像を描くワークショップを行いました。地元の保育園・幼稚園の園児や先生、まちづくり協議会、シニアクラブ、花店、芸術家、公園利用者など様々な世代や職種、団体が集まって木の伐採や壁面装飾、遊具製作などを行い、手作りで魅力ある公園に変身させました。自分たちがつくりあげた公園には愛着がわき、花の世話、草刈、掃除なども分担して管理も行っていきます。

公園の整備をきっかけに、保育園と幼稚園、そして地域が春と秋の交流事業を行っています。交流事業では、芸術家たちが協力し、「妖精の扉」を設置して妖精との手紙のやりとりを通して、子どもたちの創造性を育むプログラムや花植え、焼きいも体験活動など公園を活用した内容となっています。活動を続けて約10年、小さかった子どもたちが、大きくなって公園を忘れず、今度は保育園幼稚園園児のお兄さん、お姉さんとして公園づくりに地域の人たちと共に参加しています。子どもたちが安心して遊ぶ、様々な世代が交流できる場に生まれ変わった皇美麻公園。今後も地域の大事な場所としてあり続けます。

地域の宝を活かして働く場をつくる

資源循環でできた着火剤

TEAM CHAKKA

滋賀県には障害者手帳を持たない障がい者が1000人以上おられるそうです。様々な理由によって働きたくても働けない人たちに手を差し伸べようと、働く場の仕組みを考えられたのがこの協働事業です。働き・暮らし応援センター「Tekito」と連携する「TEAM 困救」では、薪割りや草刈などの就労の場を提供していましたが、より継続的に取り組める仕組みを求めていました。この事業で、午前中週2回、継続的に4〜5名の働く場が提供できたことが最大の効果です。商品の「CATCH FIRE」は、愛のまちエコ倶楽部で生産している、もみ殻くん炭の作成過程で生まれる粉と各家庭や事業所で不要になったキヤンドルやろうそくを混ぜ合わせて作る国産リサイクル着火剤です。必要な分だけ割って使え、ブロック一個で約7分間燃焼する優れものです。また「愛しやぼんジェル」はリサイクルシステムで回収された廃食油を使用して、ジェル状の石鹸にしたものです。合成洗剤と比べて、河川での分解が早く、環境に優しい商品です。若者向けのデザインとジェル状にしたことで、即完売となる人気商品となっています。TEAM CHAKKAでは、いかに工程を増やし、働く場を多く提供するかを念頭に考えられています。隙間仕事を増やすことで、仕事に関する人や、仕事のマッチングの機会が増えるからです。生きにくい若者たちを地域の宝として一緒に取り組んでいくこの事業は、多くの共感を呼び、地域の応援団を増やしています。

蒲生の地からつくる

地域を元気にする特産品

蒲生地区まちづくり協議会

蒲生スマートインターの近くに、市が管理する休耕地が存在することを存心でしようか。この土地を使い、地域の特産品を生み出そうと、市や大学と連携をしながら、新しい取り組みを始めているのが、蒲生地区まちづくり協議会です。この事業は、蒲生地区まちづくり協議会と龍谷大学、そして市が協力して行っている今年度始まったばかりの事業です。龍谷大学農学部が学生たちが、学びの場としてこの地を訪れ、農業実習をおこなったり、地元の人と触れ合ったりすることで農業の基礎だけでなく、多くのことを学びます。また、地元の方は学生たちとの触れ合いの中で、新しい刺激を受けることができることが一緒に活動する上でうれしいの一つです。今年度は、蒲生スマートインター近くの圃場に大豆を植えて、地域の新しい特産品の生産を試験的に取り組まれています。また、近くの圃場にはコスモスを植え、秋には訪れる人が、美しいコスモスに心を癒される場となり、新しい名所となつていくそうです。そして満開に咲いたコスモスを生かしたイベント「がもうフェスタ」をあかね古墳公園で開催されました。当日は、龍谷大学の学生さんも手伝いに来られました。そして、今後の特産品づくりのヒントになるよう、地元産の食材を使った、開始と同時に売り切れたので、地域の食材を使うことに対する感心の高さがうかがえました。「農地だからこそできること。」を今後検討しながら、田園風景が残る美しい蒲生の地を多くの人にアピールできる取り組みとして、そして農地から生みだされる可能性を今後広げられていきます。